

洋書輸入協会会報

VOL. 8

NO. 2

(通巻82号) 昭和49年2月

理事会報告

1月10日(木)

諸情勢について討論。

1月16日(水)

同上

懇談会報告

1月16日(水)

諸情勢についての理事会の討論について報告、出席者の了承を得た。

新年懇親会

新年懇親会は1月8日(火)例年のように丸ノ内ブレスクラブで催された。参加者は会員その他60社136名、REP.13社24名の計160名と昨年を大きく上回る盛会となった。文化厚生委員長洋販の渡辺社長の名司会によってはじまり、新理事長の飯泉丸善社長より「物価騰貴、為替の変動、石油問題など戦後最大の危機とも言ふべき激動の年ではあるが会員は互に協調して業界の繁栄と従業員の福利厚生に努めよう」との挨拶があった。つづいて、先ごろ名誉

理事長に推戴された丸善司忠氏の協会理事長としての20数年間に渉る尽瘁に対して感謝状と記念品の贈呈があり、国際書房服部社長より同氏の代理、丸善の中川常務に手渡された。

また、Rep. of Japan English Service の

アルバーグ氏、O.E.C.D. のバーネット氏、General Learning Co. のランバート夫人らが和気あいあいとした雰囲気の中に紹介され、参加者相互のなごやかな歓談がつづけられた。7時紀伊國屋相良氏よりしめくくりの挨拶があり、全員の万才三唱をもって名残りを惜しみつつ散会した。

(白鷗洋書・秋山記)



感謝状

司 忠 殿

貴殿は昭和二十二年以来当協会の理事長として二十有六年の永きに亘りその再建と発展に尽されました会員一同の深く感謝するところであります。茲に貴殿の功績を讃え名誉会長に推戴するとともに記念品を添え感謝状を贈ります。

昭和四十九年二月八日

洋書輸入協会



理事会報告	1
新年懇親会	1
文化厚生委員会だより	2
Book Review	2

A B P 訪問記	3
会員紹介 (榎大阪洋書)	5
海外ニュース	5
外国出版社の紹介	6

通関統計	7
総代理店御案内	7
会員の横顔(内外交易欄)	7
広告 医学書院	8

文化厚生委員会だより

“ゴルフクラブ納会”

ゴルフクラブ72会第6回コンペが12月25日伊豆天城ゴルフクラブで行われた。この日を期する、つわ者共17名（過去最大の参加数）が前日より続々と集合、にぎやかな前夜祭が行われた。明けて試合当日は晴天、無風、富士も間近に見える絶好のコンディション。各選手優勝トロフィーをめざして火花を散らす激闘27ホール。結果、優勝の栄冠は、苦節

1年有余、週2回の“道場”がよいを欠かさないと云う“ダークホース”市川氏の頭上に輝いた。順位次の通り。

優勝 市川氏（ブックス・フォア・アジア）

2 アンダー（H'cp 34）

準優勝 鍵谷氏（ノベルティ）

パーブレイ（H'cp 24）

3 位 上杉氏（U.P.S.） 2 オーバー（H'cp 24）

次回は3月の予定。多数の御参加を期待します。
初参加大歓迎!! （幹事 上杉（U.P.S.）記）

BOOK REVIEW No. 12

書物・情報・読書—知識整理と活用の技術—

紀田順一郎著 264 pp. ￥980

昭和47年11月 出版ニュース社刊

情報は人々の現代読書界にあって、いかに効果的な情報収集と整理をなすべきかと云う問題を書物論と有機的に結びつけ論じているのが此の本の特色と云えよう。

第一章では此の本の副題を扱っており感覚的な情報蓄積を質的に高め維持する難しさと従来の経験の上に立って、もう少し意識化しシステム化した整理・活用の技術を具体例を挙げて説明している。

第二章“情報源としての書物”の中では情報化社会における出版界の花形商品“百科事典”をはじめ辞典、便覧、全集、文庫、雑誌、洋書など各項目別に著者の見解を披瀝している。また入手性の点では一般的に在庫期間が短く数年で絶版になり易い和書と比較して洋書は文献リストを見て発注しても大半が入手でき、なかには20数年も在庫している例がある事、日本でも入手性の点で文庫本は比較的寿命が長い、Everyman's Library とか Modern Library などの叢書が何十年（ものによっては70年位）も絶版にならずに在庫している事など興味深く読ませる。我々洋書業者が一番気になる洋書の項目では Bowker などの総合カタログでも編集期間のズレから新刊が掲載されておらず検索に不便を感じるが、分野によっては洋書店の速報類が有効であるとしている。また、洋書購入の不便の一つとして絶版、品切の確認が遅い点、入手までに3ヶ月或はそれ以上の日数を要する場合が多い点も即応性を求める現代の読者の要求に合致しないが洋書の需要が増える国際化時代にあっても此の様な根本的な問題は容易に解決されるとは思えないと著者は結んでいる。

第三章“書物の認識—情報価値の外側”ではビブリアマニア、珍本・稀本、限定本などについて面白く読ませてくれる。情報の受け手であり送り手でもある洋書業者にとっても此の本は一読の価値がある。 (SN)

A B P 訪 問 記

伊 藤 二 悦

いまロンドンでは、「電力不足」のために週3日労働制が実施されている由である。寒空と薄灯りのロンドン——われわれの訪れた去年の10月には、考えもおよばないことだった。かつてはロンドンの代名詞であったスモッグもみえず、小雨霧の第一日目であったが、翌10月4日のロndonは、朝から実に見事に晴れあがり、ホテルのすぐ近くにみえるハイパークの一角は、みどりの美しさにあふれていた。

この陽光にさそわれて、昼のペンギン・ブックスの招待にすっかり気をよくして、あの、どこまでも広がる牧草の美しい緑や、ウィンザー城にみとれたりなどしていたのがいけなかったのかもしれない。ABPのOverseas Marketing Directorとして日本にもよく顔をみせた John Spragg さんをすっかり待たせるハメになってしまった。役目からおそらくあの大きな体をゆさぶりながら、じれったい気持ちでいたにちがいない。

ABPのHead OfficeのあるNew Fetter Laneは、ヒースロウ空港に真近い、緑に囲まれた、あたかも大邸宅を思わせるようなペンギンの事務所とは対照的に、ロンドンの真っただ中のビル街に位置している。国際的な金融の中心地シティの西側に隣接するHolbornの一角である。

地図をひろげると、その東側にStrand（あとで、ここにあるシンプソンでロースト・ビーフを御馳走になるのだが）やSohoが並んでいる、ピカデリー・サーカスもそう遠くない、といった地点である。

東京にくらべると、ロンドンとはしかにとても小さく感じさせる。とはいえ、約束の午後4時が近いというのに、まだ西のはずれ、というのでは中心街に行きつけるわけがない。それでもなお、ペンギンの好意による自動車をせかせせながら、それバッキンガム宮殿だ、やれトラファルガー・スクエアだ、と車の窓にのりだして、パチリパチリと懸命なのだから、まったくいい気なものであった。

待ちかねたSpraggさんは、とうとうNew Fetter Laneの11番地の街角に立って、足ぶみしながら、われわれを待つことになってしまった。話せないというのは情けないものである。これほどの迷惑をかけながら、I am very sorryぐらいで済むわけがないのだが、何とも致し方なしである。

道に面して、傘下の各出版社別にきれいに飾られたショーウィンドーを一階にして長方体のビルが14



階にのびていて、これがABPの事務所であった。ロンドンで驚くことは、ひとつひとつのビルの四方がすべて道路になっていて空間がとても広くとってあること、道路には、どんなに細いものでも必ず歩道が両側にきちんと揃っていること、大公園や小公園がいたるところにあること、である。このビルも例外ではなく、広い空間の向い側に、小さな森を思わせる木立ちがみられた。郊外の美しさといい、市内の緑といい、これにくらべて東京は何というひどさだろう、とつくづく感じたことである。

さて、一行6名は、ただちに9階の会議室に通されて、待ちかねたABPの面々と挨拶をかわし、「いかめしく」用意されたテーブルをとりかこんで「話しあう」ことになった。日没のおそいロンドンだが夕陽がかなり傾いている時間に達していた。

ABPの歓迎ぶりは、実に鄭重なもので、その格式は、まさに「英国紳士」のものであった。テーブルに置かれた「資料」には、「日本洋書輸入協会派遣団招待会要項」なる一枚の紙があり、11月に来日されたGroup Marketing DirectorのMichael Turnerさんはじめ接待役9氏の名前と役職が列記されており、晩餐会は、Simpon's-in-the-Strandで午後7時半から、ホスト役は誰々、という記載があった程の周到さである。

部屋の片側の壁に、やはり各社別のディスプレイがあり、それを背にしてTurnerさんが席をとり、真向いに、白髪のお紳士Bruce Walker (Deputy Group Marketing Director)さんが座った。そして主宰者のTurnerさんが、先ず、一行に対する歓迎の辞を語り出した。

「ABP-Associated Book Publishers Ltd. というのは、御承知の如く、Methuen, Methuen Child-

ren's, Eyre Methuen, Chapman & Hall, E. & F. N. Spon, Tavistock, Sweet & Maxwell, Stevens & Sons, Eyre & Spottiswoode など各分野有数の出版社によってつくられているグループである。ロンドンが手狭になったため、Hampshire の Andover にビルをたて、受注、発送、インボイスなどの仕事はすべてそちらで行なうようになった。事業はお陰様で順調に伸びており、お手許にある1972年のAnnual Report に示されているように、本社からの輸出および海外での売上げは合計7,621,000ポンドで、これは、グループの総売上げの70%に当る。(1971年は67%であった)。こんどの訪問を契機に、いっそうの御愛顧をおねがいしたい。わたしも11月中旬に日本を訪問し、双方の業務の発展のために寄与したい。』

(『Annual Report 1972』によれば、資本金百万ポンド、純益が333,807ポンドとなっている。)

Turner さんの話は、だいたいこんなものだったろうと想像する。イギリス人が英語が得意なのは、当り前のこと、むしろ、われわれが多少なりとも外国語に通じていることが大変なことではないか、イギリス人で日本語がわかる人が一体どれだけいるのか、などと力んではみるのだが、この際は無力である。折角のTurner さんの懇切な歓迎の挨拶も「想像」で聞くほかはなかった。

ともあれ、歓迎に対しては、答礼が必要である。感激の気持とあわせて、遅刻したお詫びもこの際は申し添えねばならない。われわれ一行、すなわち、相良(紀伊國屋)、大野(丸善)、野村(三省堂)、志保沢(国際書房)、長谷川(もと東販)の各氏とそれに私、伊藤(極東)を代表して、先ず相良さんが日本語で話し、それを大野さんが通訳するという形で「答辞」を行なったが、その話のはずみで私がこの一文を書くはめになったことを別にしても、汗をかかなければならなかったのは、お詫びの言葉のためでも、陽気のせいでもなかったことは確かなようである。つづいて、隣室との仕切りが開かれて、カクテルパーティーがおこなわれ、スコッチの水割やキャビアを楽しみながら、多少は舌のまわりもなめらかなになったところで、「懇談」が続けられた。

この会議室からの眺望はよく、「なるほどここであの暴れん坊のユーロ・ダラーが…」と、夕やみせまるシティを一望のもとに見おろしながら、国際通貨の状況や見通しが話されたかどうかは知らない。氏名を失念してしまっただけだが、アジアにとて

も詳しい人がいて、日本の子供の遊びにはこれがあるだろうと、コマやタコの絵をかいて、これは日本語では何というか、などと話しあうことになり、調子づいた私は、漢字、ひらがな、片カナをローマ字綴りの名前と並べて書き示し、日本人はこんなにも苦労するんだぞといばって見せたものである。ところが、ウエイトレス役の若い女性が、その漢字を指さして、“beautiful!”と口にしたのを聞いて、逆に驚いてしまったのは私の方である。外国語というものはつくづくむずかしいものである。

そうしているうちに時間もすぎ、事務所での懇談会は一応終り、例のシンプソンに向うことになるのだが、Strand へ向うのに、いったんホテルに戻ったために、ホテルのフロントが、私のチェックインがどうのこうのとした面倒な問題になり、余計な時間をくい、またまた、遅くなってしまう尾ひれがついてしまった。幸いなことに、先着の人たちが、まだ食前のカクテルルームで、それぞれ好みの酒をたしなんでいるところであった。

古色豊かな壁やテーブル、ここの特徴である、デイナー・ワゴン、文豪ディケンズもよく通ったという、このSimpson'in-the-Strand での晩餐会はWalker さんの主宰である。広いホールの真ん中で、大きな牛肉の塊りが、火のう えで 廻転しており、やがてワゴンにのせられて、テーブルに配られるという仕掛である。メニューによれば、Roast Sirloin of Beef and Yorkshire Pudding というのが、われわれに供された品目である。残念ながら昼から満腹をつづけている私の胃袋には、この折角のローストビーフを受けつけてくれる余地はあまりなかったことである。そばに座っていたSpragg さんに、「おいしいか？」と何度も質問させる結果となったことは、大変申し訳ないことだった。

この晩餐会には、洋販の栗原さんも参加され、終りに、代表して挨拶していただいた。こうして、ABP 訪問という“仕事”を“無事”終えたわけだが、ともかくも有力な取引先の人々と直接親交を深めることができたという、意義あることだったのではないか、こう考えることにしている。

Books for Asia の市川さんには、出発前からお世話になったが、この私の一文から、われわれの深謝の気持をくみあげて、Turner さんやSpragg さんにうまくお伝えしていただければと思う次第である。(極東書店)

「英国の燃料危機と出版界」

炭鉱スト、石油不足、鉄道の順法斗争などが重なって、英国は深刻なエネルギー危機に見舞われ、この1月から厳しい政府の制限措置がとられている。当面、出版社や書店も照明や暖房の制限などに冷静に対処しているが、その長期的な影響についての見通しは暗く、1940年代以来はじめての重大な局面に立とうとしている。

書店の場合、1月1日から実施された規制下では、電力は午前と午後交互に供給されるので、どうやら週6日開店は可能である。

出版社に対する規制はほぼ他の商事会社と同様であるが、電力の使用は週3日しか許されない。多くの出版社は、電気がない2日間の勤務時間を調整している。例えば、ペンギンは午前9時から午後3時まで、ボドリーヘッドは8時30分～4時00分、オックスフォードは8時45分～3時30分というように、勤務時間をずらしている。他の出版社もほぼ同様の手配をしているが、ある大出版社では、貴重な日中の4時間を無駄にしないために、ビジネス・ランチを禁じている。

紙の供給と印刷の問題はもっと深刻である。出版社の出版計画はかなり狂ってくるのが予想されている。1月出版予定のものを2月に延ばしたり、1月には1点も新刊書を出さないことにしたり、ハイネマンのように新刊よりも重版を優先したりしている。ペンギンは出版点数を半減する模様であり、他の大出版社では、重要度によってA、B、C、のランクづけをしたりしている。

印刷会社は、自家発電の設備をそなえているものもあるが、燃料の手持ちの量はまちまちで、概して生産量の減少は免れえない。定期刊行物を優先するため単行本は遅れる傾向もある。

鉄道の順法斗争は、すでに紙の輸送を遅らせているが、製紙工場が週に3日しか働かないことによる減産は、現在正確な予測は立たないが、必至と見られている。

コンピュータと電動タイプライターの電気使用は許されているので、オーダーの処理にはあまり影響はないようである。

いずれにせよ、1月と2月の新刊書の出版点数は、これまでになく低いものになりそうである。

(The Bookseller, 1月5日号より抄録)

会 員 紹 介

株式会社 大 阪 洋 書 (準会員)

代 表 者 川 久 保 清 志

昨年3月、竹内書店大阪営業所のメンバーがそのまま参加して設立、まだ一年にも満たない会社です。小さな航海を続けておりますが、それもひとえに、竹内書店の優秀な人材を譲りうけることができたからに他ならず、その点、竹内さんにはどれほど感謝してもしきれない次第です。

竹内書店の頃から、東京の本社とちがって大阪は文学・語学を中心にしてやってきました。当然、大阪洋書も英米文学、フランス文学、語学を主として扱ってゆくことになりますが、竹内書店のよき伝統を引き継ぎながら、時代にマッチした、できるだけ小さな洋書店でありたいと念じています。

「ベルテルスマンがフィーヴェークを取得」

オックスフォード／ニューヨークのパーガモン・グループは、その西ドイツの子会社 Friedrich Vieweg und Sohn を、ベルテルスマン・グループに譲渡した。同社はベルテルスマン・グループの一員として、従来の社名のまま、経営陣・編集陣も変わらず、これまで通りブラウンシュヴァイクの地で業務を続行する。

同社は、年間売上げ 800 万マルクの、理工系専門書および雑誌の出版社として知られている。

(Börsenblatt 西独版 1 月 4 日号より)

—— 紀伊國屋書店提供 ——

外国出版社の紹介 No. 25



B. SCHOTT'S SÖHNE, MUSIKVERLAG, MAINZ

現在の有力ドイツ楽譜出版の一つである B. Schott's Söhne は本社をマインツ（フランクフルトの近郊ライン河畔にある都市）に置き、その支社（現在はそれぞれ独立している）をロンドン、ブラッセル等に持っています。

創立は1773年にベルナルド・シヨット氏によって行なわれ、1817年ベルナルドの死により息子たちアンドリアス（1781～1840）とヨゼフ（1782～1855）に引きつがれた。1838年に英国のロンドンに支店を設立しその経営には三男のアダムスが当たった。アダムスの死後はヴォルフ（1815～1881）、ウルカートにより引きつがれてきた。現在ロンドンの Schott's はポケット・スコアーで有名な Eulenburg 社を吸収して社名を Schott Eulenburg Ltd. として大きく発展している。

19世紀初めにアントワープに支店が開設され、それは後にブラッセルに移転し現在の Schott Frehle, Bruxell となった。この支店は海賊版の防止とフランス、イタリアの作曲家を獲得するために有効であったようです。又このブラッセルを基盤としてパリにも支店が設立された。これら、マインツ、ロンドン、ブラッセル、パリの支店は独立した会社であります、その他に一時期、ライプチヒ、ロッテルダム、ニューヨーク、に支店を持っていた。

楽譜出版、印刷技術の進んでいなかった時代であったので Schott の出す楽譜は外国にも多く輸出され使用された。同時に印刷技術を改良して他の出版社との差をつけて来た。リトグラフを楽譜印刷に使用したのも Schott が始めての様です。ワグナーのマイスタージンガー、ニューベルンゲンの指輪、パルシファル、ウェバーのオペラ、その他ロッシーニ、ドニゼッティなど多くの大曲がこのリトグラフによって出版されました。

どこの楽譜出版社も同様ですが Schott's も若手作曲家に対する援助を行っており、Hindenrith を始めとして有名な人を育てています。

主な出版物としては Riemann の音楽辞典、ワグナー全集、シェーンベルグ全集等があります。

通 関 統 計

外国貿易概況（大蔵省関税局編、日本関税協会発行）1973年10月号所載。

書籍、新聞、雑誌の輸入額。

昭和48年10月 \$5,466,000 1月以降累計 \$54,924,000

昭和47年10月 \$5,063,000 \$51,257,000

（註）此の統計は、C I F 価格で10万円以下の少額貨物は含まれない。

総代理店ご案内

次の通り日本総代理店の案内がございました。お手許の Agent List にご記入願います。

（株）紀伊國屋書店 ☎ 354-0131

France Expansion, France

Martinet, A. & H. Walter,

Le Dictionnaire de la Prononciation

française dans son usage réel. 932 p. 1973

予約価（3月15日まで）：¥12,800

定 価： ¥14,800

（株）丸 ☎ 272-7211

Bailey, R. W. (ed.) - The Cervical Spine. '74.

approx. 450 p. with illust. (Lea & Febiger)

ca ¥5,610

Kohler, P. O. and G. T. Ross (eds.) - Diagnosis and Treatment of Pituitary Tumors. Proceedings of a conference sponsored jointly by the National Institute of Child Health and Human Development and the National Cancer Institute in Bethesda, Maryland, Jan. 15-17, 1973.

(International Congress Series No. 303) '73.

approx. 350 p. (Excerpta Medica) ca ¥13,000

Loomis, J. A. - Essential of Toxicology. 2nd ed.

'74. 217 p. 26 illus. (Lea & Febiger) ¥2,890

Martin, E. W. and others (eds.) - Hazards of Medication. A manual on drug interactions, incompatibilities, contraindications and adverse effects. '71. 895 p. illus. (Lippincott) ¥9,350

Sax, N. I. (ed.) - Industrial Pollution. '74 (Van Nostrand Reinhold)

ca ¥8,820

（株）オリエンタルブックセラーズ ☎ 203-2741

Hive Publishing Company, Easton, Pennsylvania

Hive Management History Series. (Reprint)

68 Titles.

ca. ¥562,200

会 員 の 横 顔

内外交易株式会社

山 縣 有 光



「今になって考えてみますとね、私の人生は軍人としての20年とこの会社と共に過した20年とに大きく分けられるような気がするんですよ。」と今年古稀を迎えられる山縣さんは語り始める。幼年学校から陸大、と軍人としてのエリートコースを進み、24か25で少尉に任官してから終戦までの20年と、内外交易を創立されてから今日まで（同社は昨年創立20周年を迎えた）、いわば二つの人生を生きてこられたことになる。

金銭というものに全く無縁であった前半戦。儲けることは罪悪であるとされた教育の中で育った山縣さんが実業の世界に入るのには数年の修業期間さえ必要であった。「洗脳のつもりで、株を少しばかりやってみたいしましてね」と今では笑って話されるが、恐らくその頃の山縣さんの気持は、つきつめたものだったのではなからうか、と想像される。それでもなお、初めての商売で2-3割の利益を計上するとき、こんなことをして良いものだらうか、と考えたというのだから、武士の商法といわれても仕方のないところであらう。

しかし、その二つの人生が全く断絶したものだったかという、決してそうではない。ドイツに駐在武官としていられたこともある山縣さんは「情報」というものの重要さを身に沁みて感じている。各種の情報を集積し、それを適確に判断するということ、それから事を決する迄は徹底的に討議するが、その結果として決められたことには欣然として従うということ、この二つを骨子として今日の「みんなの内外」がある。

趣味はお酒と音楽で、御自身でフルートを吹かれる。幼年学校当時、一年ほど病を得て休まれた時に、いつでも携行出来る楽器をと考え習い覚えたものとのこと。さもなければ、当時の幼年学校ではそのような「軟弱なこと」は許されなかったという。今ではお孫さんの伴奏で、時々フルートを吹くのが楽しみ、という微笑ましいお話を伺った。（自宅：世田谷区豪徳寺2-8-3）（鈴木和夫記）

グレイ解剖学・ロングマン版

GRAY'S ANATOMY

New 35th Edition

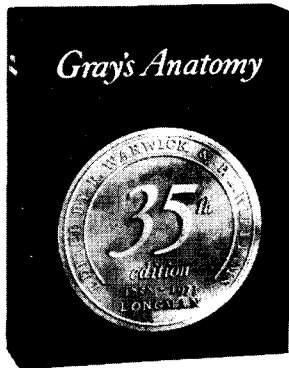
Edited by R. Warwick & P. L. Williams

1858年、Dr. Henry Grayが世に問うて以来、幾多のすぐれた後継者により改訂され、百有余年の伝統を誇る解剖学の世界的古典Gray's Anatomyが6年ぶりに新版を迎えました。

このたびの新版は、Roger Warwick, Peter Williams両教授により新次元を画する全面的改訂が行われました。もちろん百年の伝統を受けつぐ基本的骨格が不変であることは言うまでもありません。

全体の頁数は、約1,470頁と変わりませんが、判型は従来の版よりタテ5cm、ヨコ7cm拡大された結果、実質的には50%増加と云ってよい充実ぶりです。

解剖学の古典的名著として、解剖学研究者ならびに医学者にとりバイブルとも云うべきものであり、また学生の教科書、参考書としても最適のものです。広く御利用をおすすめ致します。



Contents:

1. Cytology
2. Embryology
3. Osteology
4. Arthrology
5. Myology
6. Angiology
7. Neurology
8. Splanchnology
9. Bibliography

1,471 pp. 1,600 figs. 600 in color 35th ed. 1973
特価 ¥10,000 (定価 ¥12,000)

CHURCHILL LIVINGSTONE, Edinburgh

日本総代理店 医学書院洋書部

〒113 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル
TEL 東京 (03) 814-5931~3 振替 東京 53233

昭和49年2月 通巻第82号 洋書輸入協会 編集者 寺久保一重
☎ 103 東京都中央区日本橋1丁目20番3号 藍沢ビル 302号室 ☎ 271-6901
☎ 530 関西支部 大阪市北区芝田町28 第一山中ビル ☎ 371-5329